

白山ふるさと文学賞

第六回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年小説の部 最優秀賞

ご注文は、
どんな本？

松任小学校五年

柳瀬やなせ

千優ちひろ

「読んじゃった！」

とうとう読んでしまった。最後の一冊。

「お母さん、行ってきまーす。」

お昼ご飯を作り始めたお母さんにげんかんからさげんでカバンを自
転車のカゴにほうりなげた。すっかり春で桜がまいおどっている。

「嶋田先生ー。」

カウンター席の女の司書さんがふり返ってにっこりほほえんでいる。

「先生、どうしよう。もう全部読んじゃった。」

「えー。うそ。彩香ちゃん、すごい。物語の本を全部読んじゃうなん
て。」

先生が目をまん丸にしておどろいている。嶋田先生はこの小さな図書
館の司書さんで、私がこの図書館の物語の本を全て読む間にどんどん
仲良くなった。

「新しい本とかない？」

嶋田先生はくすくす笑って、こんなことを言った。

「じゃあ、本が大好きな彩香ちゃんをすてきなお部屋におつれします。

こっち、こっち。」

嶋田先生は、なんだか楽しそうにカウンターのおくに入っていく。そ
してスタッフルームの中にあるドアの前でとまった。

「ここよ。」

嶋田先生が指したのはそのドアだった。

「どうぞ。」

先生がドアを開けて言った。

私がおそるおそる中に入った。

「それじゃあ、私は仕事にもどるからね。」

「えっちょっと…えー。」

ボタン。…行っちゃった。

部屋は、大きな本だが一つ、小さいつくえといすが一つずつあった。

小さい部屋に一人で不安だったけど、本だなにある本を見るとわくわく
してきた。どの本も古く、横になっている本もあるし、どれもほこりを
かぶっている。仕方ないので一冊ずつ直していると、一冊の本が目にと
まった。かなり古い本らしく、題名が見えないし、はじめの方が黒くなっ
ている。なぜかこの本は読まなくてはならない気がして、本を直すのを
やめてほこりだらけのいすにこしかけた。本の表紙をひとなでして、本
を開いた。そのとき、「ボンッ」と大きな音がして私は本の中にすいこま
れていった。目を開くと、そこは、小さなカフェのようだった。しかし、
店員さんもお客さんもみんな動物で、出されているのも本だった。

「いらっしやいませ。ご注文はどんな本ですか？」

と、うさぎの店員が話しかけてきた。

テーブルのメニューはこんなだった。

わくわくする本／三〇〇

悲しい本／四五〇 おもしろい本／五〇〇

やってみたくなる本／四〇〇

恋の本／三〇〇 失恋の本／三〇〇

友情の本／三〇〇 おすすめ／二〇〇

「えっ。でも私、お金持っていないから…。」

出ようとするとうさぎがあわてて言った。

「こちらの数字は、お金ではございません。このお店では、お金の代わ
りに、本を読む前の気持ちを少しだけいただき、新しい本の原料にして
いるのです。ですから、数字の単位は、『円』ではなく、『ミリリットル』
なのです。」

気持ちを取られると思うと少しこわかったけど、本が読めると思うと、
楽しみで仕方無かった。

「じゃあ、ちよっとだけ。おすすめを。」

「しようちいました。」

そして、うさぎは、小さいガラスのビンのような物を持って来た。そ

して、ビンを私の方へかた向けると、私のむねのあたりからすうつと白いかたまりが出てきて、ビンの中にすいこまれていった。

「おまたせしました。こちらが、ご注文の本になります。」

それは、「さくらの花びら」という本だったのだが、図書館で読んだことがあった。

「あの…、この本読んだことがあるんですけど。」

すると、うさぎは、にっこりして言った。

「本は、何回読んでも同じ物語にはなりませんよ。」

と言つてカウンターの中へ入っていった。本当はちがう本を読みたかったが、仕方ない。

だが読んでいるうちに気がついた。前にも同じ本を読んだのに、ちがう物語を読んでいるように感じたのだ。おもしろくて、おもしろくて、夢中で読んだ。そして、本をとじた時、来た時のように、「ボンツ」となって、ほこりだらけの部屋にもどっていた。

「楽しかった？」

嶋田先生がにこにこしながら聞いてくる。きっと先生も行ったことがあるのだろう。

「うん。すつごく。」

その後、もうあそこに行くことはできなくなっていた。でも、この図書館の司書になった私は、本の本当の楽しさを知らない子を、あの部屋へ案内するのだった。

